

王弟様の溺愛が重すぎるんですが、
未来では捨てられるらしい

目次

王弟様の溺愛が重すぎるんですが、
未来では捨てられるらしい

番外編 運命の分岐点

◆セオドル・

クラウス◆

◆ 国教会の大神官長補佐。
王のよき友人。次期大神官長
と言われるほど優秀で、
ハルトの面倒を
見ている。

◆ハルト◆

◆ 突如、力が
目覚め御子として
王宮に連れて来られた
元平民。純粹で素直。
エリアスを
慕っている。

◆カーティス・

ヴェルナー◆

◆ エリアスの親友。
実は転生者で前世の記憶
があり、未来を変える
ためエリアスに
相談をする。

◆エドワルド・

グレイシア◆

◆ 現王であり、レオナードの兄。
レオナードとよく似た顔立ち
だが弟より茶目っ気があり、
それでいて威厳のある
懐の深い王。

◆レオナード・

グレイシア◆

◆ 現国王弟で軍事司令官を
務める。真面目で何でもこなし、
部下にも平等だが、エリアス
にのみ異常な執着心を
もっており……

◆エリアス・

フィンレイ◆

◆ 子爵家の次男で王弟の
側近。レオナードと恋人同士
だが、いずれ別れることに
なと思っていた最中、
報せを受ける。

◆登場人物紹介◆◆◆

王弟様の溺愛が重すぎるんですが、
未来では捨てられるらしい

第一章 王弟と側近

王弟レオナード・グレイシアという男は、間違いなく優秀な王族である。

冷静沈着で有能、国の軍事的な最高司令官として王をはじめ国民や軍から厚い信頼を寄せられている。王族としての立場を強く自覚しており、加えてその見目は驚くほど整っていた。

宵闇のような黒の髪に金色の瞳と柔和な表情の奥に鋭さを隠した顔立ち、長身の精悍な体つきと相まって黒豹を思わせる。すべてを兼ね備えた男。それがレオナード・グレイシア。

——それなのに。

この世のあらゆるものを望めば手にできるはずの男が、どういうわけか、「エリアス・フィンレイ」という一介の文官ばかりを、宝物みたいに抱え込んで離さない。

「お前は、私のものだ」

真剣な眼差しとともに、いつものようにそう囁く。エリアスは、ため息をつきたい衝動をぐつと堪え、手元の書類を持ち直す。

「……まあ、そうですね。あなたの側近ですしね」

つい素っ気なく答えてしまうのは、もはや癖だ。愛されていることに疑いはない。だが、そこへ未来を重ねられるほど、エリアスは純粹ではなかった。

それでもレオナードは気にする素振りもなく、むしろ口角をわずかに上げた。

頬に感じる温もりと共に、肩を引き寄せられる感覚にエリアスは思わず小さくため息をつく。

「レオ様、まだ朝ですよ……」

「朝だからだ。仕事を始める前に、お前の顔を見ておかないと落ち着かない。それにその口ぶりだと、夜だと問題ないように聞こえるか？」

柔らかく耳元で囁かれ、背筋がひやりとする。その声は心地よさすら感じさせるものだったが、エリアスは努めて冷静を装い、レオナードの腕から逃れようと軽く身を振った。

「ば、かじやないですか……っ……今離れないと、王との朝議に遅刻します」

「私が遅刻したら、国が動かないな」

「だから、国のために仕事をしてください」

「それより、お前の方が大事だが？ 愛しいエリアス」

本当に困ったものだ。こんな調子で、王宮では彼らの関係は公然の秘密だった。恋人同士とはいえ、これほど堂々と王弟に抱きしめられるのはどうなのか。王宮での彼の態度は、周囲の視線を一切気にしていない。

「レオ様……！！ もっと立場を弁えてください」

「それは、お前が言うことか？」

「……私以外にあなたに進言できる人間が、いるんですか」

口調は抑えたが、心臓が早鐘を打っているのが自分でもわかる。

本来、王弟にここまで口を利ける立場はごくごく限られている。王と親族、側近。あとは、当人が特別に許した相手くらいのもの。

エリ阿斯はレオナードの側近になって数年になる。王宮では幾重にも実績を積み上げて、ようやく今の席を掴んだ。眠る時間を削って覚えた法令に古い慣習の改訂案。面倒事ばかり押しつけられた地方監査。“エリ阿斯・フィンレイだから任せられる”そう言われるようになるまで、何年かかったかと思っている。レオナードの後ろに立つことを許されているのは、恋人だからではない。積み上げてきた実績と、結果を出し続けてきたからだ。

——なのに今は『王弟殿下の恋人』

廊下ですれ違った誰かの声が、不意に脳裏を掠める。

振り返った時には、もう誰も口を開いていなかった。けれど、陰で囁かれるその呼び名には、どこか嘲りが滲んでいた。まるで、今の立場を得た理由が、努力ではなく別のところにあると言いたげに。そのたび、積み上げてきたものを、上から静かに塗り潰される気がした。

恋人という立場に不満は、ない。エリ阿斯とて真実、レオナードに想いを寄せている。

それは彼が王族であるからではなく、レオナード・グレイシアという個人に寄せた想いだ。

エリ阿斯はレオナードがどんな立場でも惹かれていただろうし、恋人としての立場を選んでいたいと断言できる。できる、が。

——この関係が、本当にずっと続くのだろうか。

何度打ち消しても、ふとした瞬間にその思いが胸の奥へ浮かび上がる。エリ阿斯が男であることは問題ない。魔力を根幹としたグレイシア国では魔法によって同性同士でも子を成すことができ、王侯貴族にも平民にも同性婚の前例は数多く存在していた。だが、“誰でもいい”わけではない。

王族ともなればそれは殊更顕著なもので、王族には王族に相応しい婚姻を求められる。

家格、後ろ盾、派閥、血筋——感情だけで選べる立場ではないことを、エリ阿斯は官僚として嫌というほど知っていた。エリ阿斯とて貴族であり、実家のフィンレイ家は子爵家とはいえ建国当初から続く家で、外交に強い名門として知られている。無論、その誇りがあるからこそ、エリ阿斯も王宮でやってこられた。

だが、上には上がいるのも覆すことのできない真実で、個人の感情だけで決まる世界ではない。今はいい。レオナードに婚約者は存在せず、外交婚姻の気配もほとんどない。

けれど、いつかレオナードが“王弟”であることを優先しなければならなくなった時、きつと目の前の男は、恋人を惜しむ心はあっても正しい道を選ぶだろう。

そして、エリ阿斯もまたそれを痛いほど理解しているからこそ、隣から退くのは、きつと自分の方だと考えている。だからこそ、レオナードが向けてくる過剰な愛情が時折重くなる。

「……そろそろ、本当に行きますよ」

「なら、もう少しだけ」

再び腰へ回された腕に、思わず息が詰まる。振り払おうと思えば、できない力ではない。それで

も、結局こうして捕まったままでいる自分がいる。

「レオ様……」

「わかつているさ。これだけだ」

レオナードの唇がそつとエリアスの唇に触れる。触れるだけの口づけ。それなのに、熱だけがじわりと残った。

「本当に行くのか？」

「当然でしょう……」

離れ際、レオナードの指が名残惜しげにエリアスの手を取った。親指が指先をゆっくり撫でるたび、離すつもりなどないと言われている気がして、胸の奥が鈍く軋んだ。

「仕方ないな」

「……仕事してください」

「お前がいけないと仕事がかどらない」

「それはあなたの問題です」

呆れたように返しながら、結局、最後まで手を振り払えない。エリアスは、爪が食い込むほど強く指を握った。

第二章 不吉な予言

そんな日々の中、事件は突如としてやってきた。

「エリアス」

ある日の昼下がり、カーティス・ヴェルナーが書類を抱えたまま王宮の廊下を歩くエリアスに声をかけた。

彼は王宮で働く内査官であり、レオナード直属の部下でもある。侯爵家と言う高い身分の息子ながらも自分より下位の者を見下すことなく正當に評価をして付き合う人徳者で、エリアスとは王立のアカデミー時代からの付き合いがあり、親しい友人だ。

王立アカデミーは、官僚や魔術師、騎士といった上級職を育成するための教育機関だ。門戸そのものは身分を問わず開かれているが、入学できるのは厳しい試験を突破した優秀な者だけ。そのため、平民出身者も存在はするものの、実際には貴族子弟の割合が圧倒的に多かった。

「カーティス？ どうした？」

「相談があつて……その、重要な話だ」

「査官としての仕事か？」

「いや、お前個人に関わる話」

エリアスは足を止め、軽く眉をひそめた。

「……なんだ？」

「ひとまず、場所を変えたい。少しいいか？」

「ああ、まあ……今は急ぎじゃないのでいいけど」

カーティスはエリアスを促すようにしながら、中庭に出た。今の時期は花々が咲き乱れて実に美しい庭園だ。周囲を窺_{うかが}いつつ、人氣がないことを確かめてから噴水の近くに陣取る。そして、口を開いた。

「僕、転生者なんだよ」

「……………は？ え、なに？ テンセイ？ え？」

「いや、だから前世の記憶があるってやつで……」

唐突な発言にエリアスは首を傾_かげる。テンセイ、テンセイ、と脳内で繰り返し、カーティスの言葉と足し合わせた結果『転生』だと気づく。辞書的に言えば、肉体が死んだ後に魂が別の肉体に宿り新しい人生を始めるという概念だ。

親友の唐突な爆弾発言に、エリアスは言葉を失う。国教会の教えの中にもそんな一説がないわけではない。けれど、到底それは信じられるものでもない。国内に前世を占う怪しげな呪い師はいると聞か、その程度の話だ。

そしてまじまじとカーティスを見据えたのちに、ぼん、とその肩を叩_{たた}く。

「カーティス、お前疲れてるんだよ……」

慈愛の眼差しでカーティスを見遣_みった。内査官というのは、王宮内で起きる問題や不正を調査する役職で、どちらかといえば忙しい部類だ。その忙しさに頭をやられているのだろう、とエリアスは思ったのである。

「いやいや、本当なんだって……！」

親友の言いざまに、慌てながらカーティスは頭を振った。その表情は真剣そのもので、エリアスをからかっているようには見えない。そしてさらに、カーティスは続ける。

「しかも、僕は断罪されるどころか、最悪打ち首だ……！」

エリアスはまじまじとカーティスを見つめた後、軽く肩をすくめる。

「内査官は敵が多いものな……まあ……そうならないように頑張れ」

「お前、他人事_{ひとごと}みたいに言うなよ！ 僕だけじゃなくて、お前もレオナード様に捨てられるんだぞ!？」

「ええ……？」

エリアスはカーティスをじっと見つめたが、彼は冗談を言っている様子はなかった。次第にカーティスの顔色が青くなってくる。

「近く、御子が見つかる」

「……御子……」

その単語に、エリアスはわずかに眉を寄せた。

御子。それはこの国に稀に現れる、聖魔法の使い手のことだ。瘴気を祓い、病を癒し、魔獣すら退けるその力は、古くから国にとって「祝福」とされてきた。だからこそ、王侯貴族は御子を求める。

力そのものと、「御子を得た」という名誉を。先代の御子が逝去してから、もう十年以上、新たな御子は現れていなかった。だからこそ、「見つかった」となれば王宮が騒がないはずがない。カーティスの声が、わずかに掠れる。

「御子は間違いなく、王宮に担ぎ上げられる。さらに言えば、見つかる御子をレオナード様が愛するようになる……！ だから、お前は捨てられてしまう」

そこでカーティスはゆっくりと視線を下げ、エリアスも無意識に息を止めていた。

——捨てられる。思わずその言葉を繰り返す。

愛に疑いはない。けれど、それに溺れるほどエリアスは夢みがちでもない。溺愛されている今が、砂上の楼閣であることは、彼自身が一番理解している。ましてや、相手が御子ともなれば……：自分なんて恋敵にさえなりえない。それが確かな未来ではないとしても、今まで何度も思い描いてしまっていた別れの未来が、急に現実の色として滲み出てきたかのようだ。

エリアスはしばらく黙ったまま、カーティスを見つめていた。そしてゆっくりと長い息を吐き出す。

「……わかった。一度、最初から聞かせろ」

「さすが親友……！ お前が捨てられず、僕が断罪されない未来を切り開きたい……！」

視線を上げたカーティスの目には、縋るような色が浮かんでいる。そんな二人へと遠くから「おい！ 辺境の村で御子が見つかったらしいぞ！」と王宮の誰かが騒いでいる声が届いた。

カーティスは「はじまった……」と頭を抱えた。遠くでざわめきが広がっていく。

御子が見つかった。たったそれだけの報せなのに、王宮の空気が、ゆっくりと形を変え始めている気がした。

エリアスはカーティスをなんとか立て直し、ひとまずその場を後にした。勤務中ということもあり、話は仕切り直しになった。

『辺境の村で御子が見つかった』という報せは、瞬く間に王宮中へ広がっていく。

ざわめきが満ちていく廊下を歩きながらも、エリアスの胸には、先ほどのカーティスの言葉が離れなかった。

——見つかる御子をレオナード様が愛するようになる……！ だから、お前は捨てられてしまう。状況を考えれば、ありえない話だと笑い飛ばせなかった。けれど。

「……本当にそんなことが起きるのか？」

レオナードを信じたい気持ちと、失う未来への恐怖が、胸の奥で静かにせめぎ合う。カーティスの話を現段階で鵜呑みにする気はない。だが、下手な嘘でからかう人間じゃないことはエリアス自身がよく知っている。

それに御子は、生まれや家格を飛び越えて、一夜で「特別」になる存在だ。事実、過去には御子を伴侶として迎えた王族もいる。その事実が、鈍く胸へ沈んでいく。

エリ阿斯はそつと胸元の装飾を握った。それはレオナードから贈られた、金の装飾で黒曜石を飾ったペンダントだ。

「この色はお前だけが持つに相応しい」

そう言つて渡された時のことを思い出す。恋人になつてから一年目の夜、レオナードがどこまでも真剣な目で自分を見つめそれを渡してきた。あれから一年経った今も、レオナードの視線は少しも変わらない。むしろ、日に日に熱を増しているようですらあった。そんな男が、そう簡単に自分を捨てるだろうか――

……わからない。愛を信じたのに、不安だけが消えない。

「……今は仕事に戻ろう」

そうして感情を押し込めるように、エリ阿斯は執務室へ向かった。けれど――

執務室に入ると、レオナードは机に広げた書類に目を落としていた。窓から差し込む光が、彼の黒髪をやわらかく照らしている。その姿を見ただけで、押し込めたはずの感情が簡単に熱を取り戻してしまふ……それをエリ阿斯は決して口にはしないが。

「おかえり」

「ただいま戻りました」

「随分長い時間、出てたな。どうせまたカーティスと話していたんだろう？」

エリ阿斯は少し驚きつつ、扉を閉める。

「……見ていたんですか？」

「いや？ お前が長いときはだいたいカーティスだからな」

「そんなにさぼったことないですけどね、私は」

レオナードは書類から目を離し、椅子にもたれかかりながらエリ阿斯に視線を送る。その視線は、内側まで暴こうとするみたいに鋭かった。

「で？ お前は何を悩んでいる？」

「……悩んでないですけど」

レオナードは立ち上がり、ゆっくりとエリ阿斯の前へ歩み寄る。いつもと変わらない、余裕を纏った歩み。けれど近づくにつれ空気が重くなるような錯覚を覚えて、エリ阿斯は少しひるんで半歩引いてしまった。

「私のエリ阿斯は、相変わらず嘘をつくのが下手らしい」

顎を軽く掴まれ、上を向かされる。レオナードの金色の瞳が、まっすぐにエリ阿斯の青い瞳を射抜いた。その視線は、隠しているものすべてを暴こうとするみたいに鋭かった。

「……っ」

「お前は、悩みがある時に視線を逸らす癖がある」

「そんなこと……ありません」

否定したものの、エリ阿斯は無意識にレオナードの目を見られず、わずかに目線を外してしまつていた。

「ほらな」

レオナードは笑みを浮かべつつ、エリ阿斯をぐっと引き寄せた。片腕が背中に戻され、距離が一気に縮まる。

「悩みがあるなら、私が解決してやる」

「いや、これは……そ、の……個人的なことで……」

「お前のことなら、どんな悩みでも解決するのが私の仕事だ。そうでないと伴侶は務まらない」唇が耳元を掠める。伴侶——レオナードの声が低く響き、心臓が跳ね上がるのを感じた。

「レオ様……近いです……!」

「お前が可愛いからだ」

「ば、かじやないですか……っ」

そう言いながらも、エリ阿斯はやはり突き放せずにした。背中へ回された腕が熱い。逃げるべきなのに、こうして抱き寄せられるたび、力が抜けてしまう。

こんなふうには抱き寄せられるたび、自分もまた、この男に溺れていくのがわかる。だからこそ、ひどく恐ろしかった。——捨てられる未来が来た時、自分はどれほど傷つくのか。

そんな考えがよぎるたび、エリ阿斯はレオナードの優しさに素直になれなくなる。

「お前を手放す気はない……エリ阿斯」

レオナードは穏やかに言い切ると、エリ阿斯の銀髪をゆつくりと指で梳いた。指先がたまに耳元を掠めて、エリ阿斯が息を呑む。

「……っ」

「信じていい。私は嘘をついたことがあるか？」

「……ないですね」

「なら、これからもない」

レオナードは再びエリ阿斯を抱き寄せた。

「安心しろ。私はずっとお前しか見ない」

「……そうなのですか……？」

「当然だ。お前が私の唯一だと何度も言っているだろう？」

そのまま、レオナードはエリ阿斯の唇を塞いだ。触れた瞬間、熱が一気に流れ込んでくる。

開きかけた唇を、舌先がゆつくり割り入るたび、思考が溶かされていくみたいだった。

(レオ様……本当に、変わらない未来なんてあるんですかね……)

「ひあっ……あ、あっ……レオさまっ」

エリ阿斯の舌足らずな嬌声^{こせう}が二人しかない執務室の中に響いていた。

レオナードの膝の上で対面となりながら、下から穿^{うが}たれる。乱された襟元から覗^{のぞ}くエリ阿斯の白い肌の上にはレオナードによってつけられた赤い痕が散乱していた。

腰を揺すられるたびに、奥の深いところを抉^{えぐ}られる。そこはレオナードから教え込まれた彼だけが知っている場所。突かれるたびに息が詰まって、声にならない音が漏れた。そうして熱に酔わされる中でもほんの少しだけ残った理性がエリ阿斯に囁く——こうして愛されていても、俺はこの人

の部屋にすら入ったことがないじゃないか。

レオナードに抱かれるのは、いつだってこの部屋だった。初めて身体を繋げたのも。

熱に浮かされたまま、この机へ押し倒され、拒み切れずに縋ってしまった。あの夜からその後も、求められる場所は変わらない。執務室——仕事のための部屋。エリアスはそこしか抱かれたことがなかった。

レオナードには、王族用の私室がある。別棟に設けられたそこへ入れるのは、王族と、その家族、そして仕える者だけ。家族。それは、グレイシアの姓を与えられた者を指す。側室でさえ、その姓を名乗ることは許されない。子以外で与えられるのは、正式な伴侶——正妃だけ。つまり、ただの恋人でしかないエリアスには、決して踏み込めない場所だった。

抱かれるたび、身体の奥まで甘やかされるのに、踏み込めない場所だけが残っている。王族が自由には外へ出られないことくらい、側近を務めるエリアスには嫌というほどわかっている。

ましてや、相手は継承権第一位を持つ王弟だ。本来なら、皇太子として立っていてもおかしくない人間。それでも“王弟”に留まっているのは、現王への忠誠と配慮ゆえだと、エリアスも知っていた。本来なら、こうして触れ合うこと自体、許される立場ではない。だから。

欲を発散するための、一時的な関係なのかもしれない——そう考えてしまうのは、どれだけ深く抱き込まれても、胸の奥に残る空白だけは埋まらないからだ。

(……本当に、俺はレオ様に必要とされているのだろうか)

そんな弱気な考えが浮かぶたび、エリアスは首を振って消そうとする。好きだということのも本当だ

ろう。伴侶にしたいというのも本当だろう。だが現実には安易ではないのだ。だから結局、最後にはいつも、いつか終わる——という考えへ辿り着いてしまう。

「……エリアス、なにを考えている？」

甘い声を出しながらも意識を集中させていない恋人に、レオナードは不満げに呟く。

「……っあ、な、にも……っ」

「嘘をつくな」

言葉とともに、レオナードがエリアスの腰を強く掴んで動かないようにしてから、思いきり腰を打ち付けた。

「……ひっ、や……だ、めえ……っ」

責められるように強く欲望で叩かれて、エリアスは背中を思いきりのけ反らせた。剥き出しになっっている薄い皮膚を纏った鎖骨に、レオナードが強く噛み付く。

「知っているか？ お前、随分と周囲に慕われているらしいな」

「あふっ……あ、なにをいつて……」

「お前はどれだけ周囲に見られているか……本当にわかっていないらしい」

鎖骨へ歯を立てたまま、レオナードが低く笑う。

実際、エリアスは自身がどれほど目を引く存在であるかに気づいていなかった。銀糸のように繊細な髪に、宝石を溶かしたかのような蒼の瞳。伏せられた睫毛が影を落とせば、そこに佇むのは白皙の佳人。寄せられる視線も、かけられたアプローチの数も数え切れない。

だが、エリ阿斯はそれに一切気づくことなく過ごしてきた。恋愛に興味を持つこともなく、ただひたすらに己の役目を果たしてただけだ。

——そんな彼を、レオナード・グレイシアだけが手にできた。

「……私だけを見る、エリ阿斯。私だけの氷華」

熱を持った舌先が、噛み痕をゆっくり舐め上げる。

「あうっ……レオさま、レオさまあ……あ、あ、あ、あ」

「覚えておけ、お前が縋るのは私だけだ」

強く、速く、レオナードはエリ阿斯を上下に揺らす。そのたびに腰が跳ねて、縋りつく腕に力が入る。終わりが近くなった頃、レオナードがエリアスの耳元に唇を寄せた。

「……どこに欲しいか、言えるか？」

レオナードの声は甘く、けれどどこか意地悪だった。エリ阿斯は耳まで真っ赤にしながら、息を乱して言葉を探す。

「……っ、あ、なかに、くださ……いつ……」

「……上出来だ、エリ阿斯」

レオナードが満足そうに笑うのが、恥ずかしくて仕方なかった。エリ阿斯が両方の手をレオナードの逞しい首に巻くと、動きがさらに速くなり——最奥を抉った瞬間に、熱がどくりどくりと注ぎ込まれる。それと同時に、エリ阿斯も男としての達し方でなく、中のみで気をやっていた。

(……身体だって、とつくに戻れない気がする……)

必死でレオナードに抱きつきながら、エリ阿斯はそんなことを思った。こんなふうに抱かれるたび、身体の奥から、少しづつ逃げ場を失っていく。もう、レオナードを知らなかった頃の自分は臍な記憶でしかなかった。

——とくんとくんと重なり合い響く鼓動だけが、静かな執務室に満ちていた。

レオナードはエリ阿斯を抱き寄せたまま、上着をそっと肩にかける。後始末は慣れた手つきで済まされ、乱れた衣服もいつの間にか整えられていく。いつもと同じ、けれどどこか名残惜しさを感じる余韻が肌に残っていた。

「……少し眠るか？」

レオナードの低く優しい声が降ってくる。その空いている片手は先ほど自身が欲望を満たしたエリアスの薄い腹を撫でていた。これもいつも終わった後に行われる行為で、じんわりとした熱が腹の奥へ染み込んでいく。レオナードの魔力には、身体へ負担を残さないための術式が組み込まれているらしい。エリ阿斯は額を彼の肩に預けながら、緩く首を振った。

「大丈夫です。……少しだけ休めば、戻れます……」

「戻る必要なんてない。今日の仕事は終わりにする。明日に回しても大丈夫なものばかりだ」

「そういうわけにはいきませんよ……」

エリ阿斯はわずかに身を起こして、レオナードを見上げた。金色の瞳は、どこまでもまっすぐで、揺るぎないものを映していた。

——こんなにも愛されている。それなのに……どうして、不安だけが消えない？
だが、自問自答の答えはすでに、ある。「王弟の恋人」という立場が、いかに儚いものか。はかなそれ
以上を望めない自分の立場のもどかしさも。

「レオ様……あなたはずっと、変わりませんね」
「当然だ」

レオナードはためらいなく言うと、エリアスの頬に軽く口づけを落とす。

エリアスがここへと配属になったその日から、レオナードは愛を囁き続けている。戸惑ったまま
三ヶ月が過ぎた。疑いながら迎えた半年目。そして一年目を迎える頃、ようやくエリアスは、その
言葉を受け入れた。

「私は、ずっとお前だけを見ている。お前が気づいていないだけだ」

しかしどれほど深く愛を注がれても、未来が確約されるわけではない。

「……いつまで、続くでしょうね」

つい零れた独り言に、レオナードは少しだけ目を細める。

「その言葉、何回目だ？」

「……さあ、覚えてませんね……」

「お前が心配しなくなるまで、私は答え続けよう」

小さく囁かれた言葉に、エリアスはレオナードの肩に額を押し付けた。

「……レオ様はずるいです」

「そんな心配をしている暇があるなら、少しは私に甘えろ」

「十分甘えていますよ。今だって……」

「……いや、まだ足りないな」

そう言ってレオナードは、エリアスの指先に唇を落とす。名残惜しむように何度も。

——これ以上、甘やかさないでくれればいいのに。

けれど、そんな言葉は、どうしても口にできなかった。しばらくそうして静かな時間を過ごした
後、先に席を立ったのはエリアスだった。

「……仕事に戻ります」

「逃げるなよ」

「逃げてませんよ」

「なら、今日はもう終わりだ。ゆっくりと休め」

「でも……」

「エリアス」

強く名を呼ばれ、エリアスは小さくため息をついた。結局押し切られる形で、机の上だけ軽く整
頓すると、そのまま執務室を後にする。部屋から出たエリアスは、気持ちを切り替えるようにそつ
と息をついた。衣服を改めて直しながら廊下を進んでいくと——向こうから見知った人物がこちら
に向かってくるのが見えた。

「エリアス、ちょうどいいところに」

「カーティス」

仕事に戻って、少し落ち着いたらしいカーティスは書類を抱えたまま、片手を軽く上げながらエリ阿斯に歩み寄る。

「なんだ、その顔。惚けてるなあ……レオナード殿下にでも襲われたか？」

「……お前は少し黙れ」

じろりと睨みつけるエリ阿斯に、カーティスは軽く肩をすくめた。

「冗談だって。それより……この後は？」

「仕事は終わりのらしい。……さっきの話か？」

「察しが良くて助かる……」

エリ阿斯は一度足を止め、周囲を見渡してから小さく息をつく。

「どこか静かな場所ですわう」

エリ阿斯が向かったのは書類庫の一角だった。お互いに文官と言う括りがあるため、過去の文章を調べるといふ体でいたところで怪しまれることはまずない。書架と書架の合間に立つて、二人は向き合った。

「端的に言う。僕は前世で違う世界にいた。そしてこの世界はそこで読んだ小説の中の話なんだ」
一言で表すならば荒唐無稽。けれどエリ阿斯は、この友人が冗談を言つて人で遊ぶような性格でないことをよく知っていた。

「なるほど」

あつさりと頷くエリ阿斯に、カーティスは一瞬きよんとする。

「信じるのか……？」

「聞いてみないとわからないだろう？」

「……相変わらず冷静だな」

カーティスは苦笑しながら、少しだけ肩をすくめた。

「まあ、お前が信じようが信じまいが、事実は変わらない。この世界は“異世界転生ファンタジー”ってやつだ。魔物がいて、御子が聖なる力でそれを浄化する……まあ、ありがちな設定さ」
エリ阿斯は軽く眉を寄せる。どこの世界線でありがちなのか、さっぱりわからないが、そこを突っ込んで仕方がないのだろう。エリ阿斯はふ、と息を吐き出す。

「ありがちかどうかはともかく、レオナード様がその御子に惹かれる未来があるということでは合っているんだな？」

「そういうこと。で、お前は捨てられる」

「……それを、改まって言うな」

エリ阿斯は不機嫌そうにカーティスを睨むが、カーティスは真剣な表情を崩さない。

「いや、僕もこの未来を見たばかりで……お前には早めに言っておいた方がいいと思っただよ」

「……しかし、突拍子もないな」

けれど、心のどこかで、やはりその言葉を否定できなかった。

カーティスは腕を組み、書架に軽く背を預ける。その仕草はどこか落ち着きがなく、エリアスの

目には「この話が少なからず本気である」という証拠に見えた。

「突拍子がないのはわかってるさ。でも……どうも気になってな」

カーティスは言葉を選ぶように視線を彷徨^{さまよ}わせ、静かに続ける。

「……お前がレオナード様に捨てられる未来、正直見たくはなかった。けど、それを知ってしまった以上、知らないふりはできない」

エリ阿斯は黙ってカーティスを見つめた。

「冗談じゃないんだな？」

「……冗談で言うわけないだろ。僕が見た未来では、御子が現れてから少し経った後に、お前とレオナード様の関係が冷え始める」

「……御子、か」

エリアスの脳裏に、ついさっき耳にした『辺境の村で御子が見つかった！』という報せが蘇^{よみがえ}る。

「……御子も、大変だな」

ぽつりと漏れた言葉に、今度はカーティスが目を瞬^{しげ}かせた。

「大変？ なにか？」

「力があるだけで、勝手に王宮へ担ぎ上げられるんだろう」

エリ阿斯は書架へ視線を落とす。

「周囲は“祝福”みたいに扱うだろうが……本人の意思なんて、最初から関係ない」

どれだけの御子が、本当にそれを望んだのだろう。初めはいいかもしれない。平民なら、一族ご

と暮らしは変わる。恩賞だつて破格だ。けれど、その先は？

(自由なんかないに等しいだろ……)

アカデミー時代からの親友は、何を言いたいのか察したらしく、エリアスの言葉に肩をすくめた。

「まあ、それはそれ、これはこれだ。話を進めていいか？」

「ああ……すまない」

「いやいいさ。で、だ。何もしなければ、お前は王弟の恋人という立場をきつと失う。でも、未来は変えられるはずだ」

エリ阿斯は小さく息を吐く。

「……さっきも聞いたよ。未来を変える方法があるなら、具体的に教えてほしいものだけれどね……」

「それが……一人ではわからないから困ってるんだよ」

カーティスは肩をすくめ、少し困ったように笑った。

「ただな、エリ阿斯」

声のトーンが少し低くなる。

「レオナード様がお前を愛しているのは事実だ。そこは揺るがない」

「……そう見えるなら、なおさら矛盾しているだろう」

エリ阿斯は腕を組みながら、レオナードのことを思い浮かべた。つい先ほどまで自分を抱きしめていた男の姿を。あれほど深い愛情を向けてくれる男が、他の誰かに心を奪われる未来があるとは

信じがたい——けれど、きつと恋とはそういうものだ。始まれば理屈じゃない。

「身分の釣り合いが必要だ。俺は子爵家の出身……せいぜい妾止まりだろうな。側室にもならない」

エリアスの言葉は決して自身を卑下したものではない。グレイシアにおける後宮制度は、徹底した家格主義だ。正妃になれるのは、他国を含めた王族、あるいは公爵家と上位侯爵家の者のみ。側室ですら、許されるのは侯爵家か伯爵家まで。それ以下の貴族は、寵愛を受ける者^{めかけ}として妾に置かれる。恋人でいるだけなら平民でも構わないが、そこに法的な保護は存在しない。

しかし、国の象徴たる聖なる存在である御子は別格だ。正妃が空位ならその座へ。たとえ正妃がいたとしても、^{めかけ}「特例の第二妃」として迎えられる。

「……ああ、その理屈もわかる。でも何よりお前は恋人だ。……逆にそれを利用すればいいんじゃないか？」

「……どういことだ」

「わかりやすいだろ？ いっそレオナード様と正式に婚約すれば、そう簡単に捨てられなくなる」
エリアスは目を見開いた。

「……お前、俺の話を聞いていたのか？ 腐ってもここにいるなら、王族との婚姻がどれほどの意味を持つか、わかっているだろう？ それこそお前の家ならともかく……」

「わかつてるさ」

カーティスはまっすぐエリアスを見る。

「でも、レオナード様が本気なら、それくらいするんじゃないか？」

エリアスは息を詰ませた。その言葉が、胸に深く突き刺さる。

——『私は、ずっとお前だけを見ている』つい先ほど耳元で囁かれたあの言葉が、ぐるぐると頭の中を巡る。馬鹿な、と頭を振った。相手から言われない以上、自分から言い出すしかない。それは自分には到底無理な話だ。エリアスは大きいため息をつく。

「……お前と話していると疲れる」

「そりゃすまないな。でも……お前がさっき言った、僕の家なら……という言葉。それに関わってくる追加情報がある」

「……なんだ？」

「このままでいくと僕がレオナード様の婚約者に内定しそうだ」

さらなる爆弾発言にエリアスは一瞬意識が遠のいた。嘘だろ、と呟きを落とす。

「……父と姉上が話しているのを聞いた。うちは良くも悪くも、家格が高いうえに——二人はそれなりの野心家だ。僕を筆頭として全員を王家に嫁がせるくらいはする。もうすでに家督は姉上が継ぐことになっていて、婿には隣国の第三皇子入る予定だ。まだ秘密だけだな」

隣国王族との婚姻だけならばまだしも、女侯爵の配偶者としての婿入り。そしてそれすら、まだ表へ漏れていない。

「王族が侯爵家に……凄まじいな……」

ヴェルナー侯爵家が、王家にも迫る力を持つことを、エリアスに改めて思い知らせるには十分

だった。

「……しかし……それでいくなら、王弟殿下よりも陛下の王妃を狙う方が……」

思考の続きが溢れたところで、カーティスは首を振る。

「……二人はお前と僕が仲が良いことを知っている」

「……………」

今度こそエリ阿斯は絶句した。つまり、正妃と妾が円満なら、面倒も少ないということか。

エリ阿斯が同性の恋人であることも、恐らくカーティスを推す理由のひとつなのだろう。そこま
で考えが至って、エリ阿斯は胃の奥が重くなるのを感じた。

(こんなの、どう抗えと……それなら、いつそ)

エリ阿斯はちらりとカーティスを見る。金の髪に赤みを帯びた深い琥珀色の瞳。どこか幼さを残し
た柔らかな顔立ち。王宮でも目を引く美貌だった。王族へ嫁がせると言われても、何の違和感も
ない。レオナードの好みかと言われれば、そこは複雑だが。

「……僕は親友と夫を共有するなんて御免だからな？」

カーティスは即座に言い切った。けれど、エリ阿斯は考えてしまう。

仮に。仮の話ではあるが——ヴェルナー家との繋がりができれば、レオナードの立場はさらに盤
石になる。ヴェルナー家が後ろにつけば、レオナードが空位である皇太子へ推されても不思議では
ない。

恐らくそれは国にとっては有益なことだ。それに、カーティスとなら、きっと自分も上手くやれ

る。多少の嫉妬はあるかもしれないが、どうにかやり過ごせるだろう。

——そんなことを。

「おい」

肩を強めに叩かれ、エリ阿斯はようやく顔を上げた。

「……痛い」

「お前『それもありが』とか思ったな？」

「……思っていない」

「嘘つけ。今、考えてた顔してたぞ」

「……黙れ」

「もう一度言う、僕は嫌だからな。それに御子に心移りするのだって——許せない」

カーティスの真剣な目を前にして、エリ阿斯は小さく息を吐いた。乱れる心を整えながら、エリ
阿斯も書架にそつと背を預ける。

「……策はあるのか？」

投げかけた言葉に、カーティスは少し困ったように眉を寄せる。その顔だけで答えは察せられた。
「……本当に見切り発車だな」

エリ阿斯は呆れたように頭を振ったが、どこかで納得もしていた。小説の先を知る転生者とはい
え、こうして相談をしている時点で、すべてを把握しているわけではないのだろう。

「だからこそ、お前と一緒に考えたいんだよ。僕が見た未来が、絶対」とは限らないし……未来は

変えられるだろう?」

——未来は変えられる。その言葉に縋るのは、カーティスだけではない。エリアスは腕を組み直し、書架の合間で少し身を乗り出す。

「具体的に、どのタイミングで未来が変わるんだ?」

「御子が王宮に正式に召し上げられる頃から、少しずつだ」

「教育期間を含めると……二ヶ月程度か……短いな」

エリアスの表情が引き締まる。すでに御子が見つかったことは二人にも承知の事実。王宮に御子がやってくることに、それを阻止することはもうできない。つまり、御子とレオナードの関係が進展する前に何かしらの“抑止力”を作る必要があるということだ。

「……つまり、レオナード様が他の誰かに目移りしないようにすればいい、ということか……」

その言葉に、カーティスが口元を緩めて笑う。

「お前が言うとうと簡単そうに聞こえるけどな……実際問題、レオナード様を手放さないって難しいんじゃないか?」

「……そうだな……」

エリアス自身、それを完全に否定できない。レオナードはいつだって正しく、その立場を理解して振る舞う。そして自分はそれを受け入れる。それが自分たちだ。

「……御子はどんな人間なんだろうな?」

エリアスはぼつりと呟く。

「それに関しては、僕もまだ思い出せない。ただ……聖なる力を持っているとしたら」

「聖なる力……ね。常人が敵^{かた}うはずもない……」

エリアスから落ちた声は苦笑交じりだった。アカデミーへ進む者なら、多かれ少なかれ魔力を持っている。中でも高い適性を持つ者は、魔術師養成機関へ進むことになっている。けれど、御子は別格だ。聖なる力とは、そういう次元のものではない。

「でもさあ」とカーティスが首を傾げた。

「確かに……物語の中ではそうなる未来を見たけど……あくまで御子がレオナード様の“好みのタイプ”だった場合の話だろ? そうじゃなけりゃ、そこまで脅威じゃないんじゃないか?」

「……お前……いや、御子と殿下がくつつくと俺に教えたのはお前だからな?」

エリアスは呆れたようにため息をつく。とはいえ、実際その可能性もあるには、ある。

(レオ様は俺以外を見ない……)

——そう言いきつてしまえばどんなに楽だろうか。だが、そう考えきれないのもエリアスだ。
「……もしレオナード様が御子に心惹かれるようなら?」

エリアスの問いに、カーティスはじつと彼を見つめた。いつになく真剣な顔をしている。

「そのときは——」

カーティスは静かに息を吸い、言葉を選ぶようにゆっくりと続ける。

「お前がレオナード様をもう一度落とすしかないんじゃないか?」

エリアスは目を丸くし、思わずカーティスを睨む。

「……バカにしてるのか？」

そもそも落とされた記憶こそあるが、落とした記憶なんてものはエリ阿斯にはない。それをもう一回と言われても、無理な話だ。

「してないさ。本気だよ」

エリ阿斯は眉をひそめるが、カーティスの言葉が心に引っかかる。

「落とす、ね……」

エリ阿斯は小さくその言葉を繰り返した。そんなことができるのだろうか……？

レオナードに抱かれている時は愛されている実感がある。けれど、それが「永遠」ではないことは頭の中で理解していた。

「まあ、最悪の事態になる前に、今できることをしておこう。僕も協力する」

「……どうも」

エリ阿斯はそつけないながらも、心の奥底で少しだけ安堵あんどしていた。未来がどうなるかはわからない。けれど、カーティスが隣にいるなら——何かを変えられるかもしれない。

第三章　そして御子はやってきた

——それから数日後。エリ阿斯は執務室でレオナードの書類を整理していた。

机には山積みになった書類が並び、すでに夕方の鐘が鳴ろうとしている。レオナードは、国事最高司令官という要職に就いている。そのため、日々処理される文書量も膨大だった。エリ阿斯が補佐してなお、減る気配がない。

もう二、三人、側近がいてもいいと思うんだが、と辟易へきえきしながらも、エリ阿斯は淡々と書類へ目を通していく。その最中、ふとカーティスの言葉が脳裏をよぎった。

『お前がレオナード様をもう一度落とすしかないんじゃないか？』

無理を言うと思ったその時、不意に執務室の扉がノックされた。

「失礼します」

入ってきたのは、外廷の侍従長だった。見知った人物で、エリ阿斯を見ると初老のその人はにっこりと笑う。

「レオナード殿下は今、どちらにおられますか？　拝見したところこちらにはいらっしやらないようです……」

「殿下は軍務の視察に出ておられます。お戻りは夜になるかと」

「そうですか……」

侍従長は一瞬ためらい、少し低い声で続ける。

「実は——御子が正式に王宮へお出でになりました」

「……え？」

エリアスは一瞬、耳を疑った。

「御子はまだ辺境の村にいたはずでは？ それに教育期間は……その、平民の方ですよ……？」

王宮は徹底した貴族社会だ。表に出る役職ほど、礼儀や格식을重んじられる。平民出身がゼロではない。だがそうした者のほとんどは、王立アカデミーで徹底的に教育を受けた人材だ。

御子が貴族だった場合でさえ、多少の教育は行われる。ましてや平民ならば、そこを無視することとはタブーに近い。

「その予定でしたが、どうやら魔物が村の近くに出没したようで……急ぎ王宮に移されたようですね。大神官長補佐が同行されておりまして」

思ったよりも早い展開に、エリアスは微かに動揺した。異例どころの騒ぎではない。けれど、それを押し通してしまうのが、御子を最優先とする王宮らしくもあつた。

「御子は、今どちらに？」

「王宮の迎賓室でお休みされています。時間が取れ次第エドワルド陛下並びにレオナード殿下に正式にお目通りをお願いしたく思っています」

「……わかりました。お戻り次第、伝えます」

エリアスは深く息を吐き、侍従長へ軽く頭を下げた。レオナードの側近は、エリアスただ一人だ。軍務以外の雑務や政務連絡、日々の調整役まで、ほとんどを彼が引き受けている。伝言を終えた侍従長は、「よろしくお願いします」と一礼し、静かに去っていった。

想定より早い御子の登場に、胸の内がざわつくのを止められない。

（ついに……御子が……いくら御子とはいえ……どこか貴族家での教育では駄目なのか）

そうは思ってみたものの——

（ああ、そうだな……王も殿下も独身でいらつしやる……）

答えは自然と出ていた。貴族家において下手な色恋沙汰に発展した場合、御子はその家で囲われることになるだろう。それは王宮としては避けたい事態だ。王やその親族ならまだしも、融通の利かない貴族家は絶対に避けなければならない。

ふと窓の外を見る。今は夕刻前でレオナードが戻るの侍従長に告げたように夜になる予定だ。

（——レオ様が戻るまで少し時間がある。見に行ってみるか……）

そう思うと、書類を手早く片付けて、執務室を後にした。

そうして辿り着いたのは迎賓室の前だが——エリアスはどうにも入ることができずに立ち尽くしていた。頭の中ではやり取りもばつちりと浮かんではいる。自分はレオナードの側近という立場だ。ここを訪れた理由なんて簡単なもので、主人が遅くなる旨を伝えに来たとすればいい。それが侍

従長から伝えられたとしても、何食わぬ顔で「入れ替わりでしたね」と告げれば済むことだ。けれども、扉の前から動けずにいた——のだが、中から誰かが出てきた。

「うわっ！」

「あつ……すみません！」

出会い頭にぶつかりかけたのは、自分より幾つか下らしい若い青年だった。

「ハルト！ 急に動いてはならないと……！」

後ろから窘めるような声を上げながら、その青年の後ろに神官姿の人物が現れる。そちらはエリ阿斯も知っていた。国教会の大神官長補佐であるセオドル・クラウスである。

セオドルもまた優秀な人物で、彼は三十序盤にして国教会の頂点である大神官長の補佐となった。そう遠くないうちに、大神官長の座へ就くとも言われている人物だ。本来、会うのだって幾つもの手続きを経て、約束を取り付けねばならない。そんな高位神官が、当然のように御子へ付き従っているのだから、本当に特別な存在なのだと改めて思う。

「君は……そう、王弟殿下の」

「はい。側近であるエリ阿斯・フィンレイです。レオナード殿下が遅くなる旨をお伝えに……」

「ああ、そうか。わざわざすまないね。ハルト。こちらは……」

セオドルが言い終わらないうちに、ハルト、と呼ばれた青年はエリ阿斯を覗き込んだ。値踏みするような視線ではなく、それは興味津々といった感じだ。

「ええと……あなたが御子か？」

嫌な気分とも違うが、少しばかり気圧^{けお}されてエリ阿斯は半歩引く。セオドルがハルトの後ろで苦虫を噛み潰したような顔で、すまない、と一言くつつけた。

「はいっ！ 辺境の村から参りました、ハルトです！」

そこにあつたのは、王宮の人間が纏うような計算高さではない。毒気のない、ただまっすぐな光だった。

（……御子っていうのは、やっぱり普通じゃないんだな）

青年は人懐っこい笑顔を浮かべたまま、ぺこりと頭を下げた。金髪に薄茶色の瞳。日焼けした肌が健康的で、少し野性味すら感じさせる。

明るく、純粹で、レオ様が気に入るようなタイプだと直感的にそう思い、こっそりため息をついた。

——もし彼がレオナードに近づけば、それはあつという間かもしれない。そう思うエリ阿斯とは逆に、ハルトは目を輝かせたまま、エリ阿斯を見つめていた。

「村でも噂^{うわさ}を聞きました。王弟殿下がすごく大切にしている方だつて！」

「……え、ええ……」

まるで予想していなかった——どこか称賛の気配さえ混じる言葉に、エリ阿斯は少し戸惑う。まさか、辺境の村にまで自分の話が広まっているとは思わなかったし、こうも手放して目を輝かせるとは意外だ。随分と人懐っこい。

この年齢なら、多少なりとも野心が滲んでいてもおかしくない。しかし、目の前のハルトは親し

みやすく、どこか無防備だった。

「……エリアス様？」

「ん？」

「これからもよろしく願います！」

差し出された手を見つめ、エリアスは一瞬迷ったが、やがて静かに握り返した。

自分とは正反対だなど思わず苦笑しそうになる。もちろん、そんなものは顔に出さなかったが。

「それでは、私はこれで——」

「待ってください！」

背を向けたエリアスを、ハルトが慌てて呼び止めた。

「エリアス様、よろしければ少しだけお話を……！」

唐突な申し出に、一瞬、エリアスの表情が止まる。知り合って間もない二人に共通の話題はないはずだ。思わず戸惑いが顔に出たが、すぐにセオドールがハルトの肩に手を置く。

「ハルト、エリアス様はお忙しい。突然の無礼を働くな」

「でも……レオナード殿下のこと、もっと知りたくて！」

その言葉に、エリアスの指がわずかに動いた。レオナードのことを知りたい——それがただの興味本位ではないことが、ハルトのまつすぐな瞳から伝わる。

「ああ、そういうことか。ふむ……私からも頼むよ、エリアス。少しの間だけでいい。ハルトにはこれから王宮での生活が待っている。王弟殿下の側近からこちらでの振る舞いを学ぶ機会があれば

助かる」

セオドールの静かな口調は、いつもの冷静さを保っているが、その奥に何か含みがあるようにも感じられた。

（御子としての責務を果たすためには、レオ様との接点が必要になる……か）

「わかりました。少しだけなら」

エリアスは静かに頷き、二人に促されるまま迎賓室の中へと足を踏み入れる。そのまま席につくと、ハルトは興味津々とした顔で正面に座った。セオドールは少し距離を置いて立っている。

「改めてよろしく願いますね！」

「ええ、よろしく。……それで、レオナード様のことを知りたいと？」

「はい！ レオナード殿下は、どんな方なんですか？」

ハルトの瞳は期待に満ちていた。悪意がないぶん、どう反応すべきか困ってしまう。

「……殿下は非常に冷静で、常に理性的です。王弟として国を支える役割を果たしつつ、軍の最高司令官として戦場にも立たれます」

「すごいですね……」

ハルトは純粋に感心した様子で目を輝かせる。

「ただし、それはあくまで表の顔です」

「え？」

エリアスは小さくため息をつく。

「殿下は非常に気まぐれで、いたずら好きな一面もあります。私もよく振り回されているんですよ」

その言葉に、セオドルがわずかに肩を揺らし、笑みを零した。

「相変わらずのようだね。王も同じ気質をお持ちだからねえ……やはり同腹のご兄弟だけあって似るものなのかな？ 君がいなければ、王宮はもつと混乱していただろうな」

「……ありがたいくないお褒めです」

苦笑しつつ、エリアスは続けた。セオドルはアカデミー時代、王とは同期であつたと聞いている。今も親交があるようで、人となりをよく知っているのだろう。

「でも、殿下は本当に優しい方です。王族でありながら、人を見下したりすることは決してない。誰に対しても平等で、公正で……だからこそ、多くの方に慕われています」

エリアスの言葉に、ハルトはぱっと顔を明るくした。

「やっぱり素敵な方なんです！ 俺も殿下に信頼されるよう、頑張ります！」

——純粹すぎる。エリアスは心の中でため息をついた。

（……レオ様の好みに、ぴったり当てはまるタイプだ）

談笑が続いていたその時、応接間の扉が不意にノックされた。

「失礼する」

低く落ち着いた声が響き、扉が開かれる。その先にいたのはレオナード・グレイシア、その人だつた。

「レオ様……いえ、レオナード様。お戻りでしたか」

エリアスが立ち上がり軽く頭を下げると、レオナードは微笑み、室内へと足を踏み入れた。

「少し早く戻った。……私のエリアスが迎賓室の前で立ち尽くしている気がしてな」

「!?」

レオナードの言葉に思わず顔を上げて顔を赤らめた。

——私のエリアス。何度も囁かれた、それ。でも、今この場で使われるとは思ってなかったし、自身の行動がレオナードに筒抜けであることにも恥ずかしさが込み上げていた。

「だ、誰がそんなことを……」

「誰にも？ 私がお前の行動を把握できていないと思つたか？」

レオナードは微笑を深めながら、視線をハルトへと向ける。

「君が御子か？」

「はい！ ハルトと申します！」

ハルトが勢いよく頭を下げると、レオナードは静かに頷いた。

「緊張しなくてもいい。私はただの臣下にすぎない。もう少ししたら陛下もお見えになると思う。何やら君に会うのを楽しみにされていたからね」

「でも……殿下は俺……いや、ええと、私たちの国を守る偉大な方です！」

その純粹な言葉に、レオナードはわずかに目を細めた。

「そうか。それは光栄だな」

「はい！」

ハルトの反応を見て、レオナードはどこか楽しげな表情を浮かべる。

——エリアスは、その様子を横目で見ながら少し複雑な心地になるのを自分でも制御できなかった。

それから幾つか言葉を交わして、御子とレオナードの対面は済んだ。呆気なく終わったそれにエリアスは少し拍子抜けしたが、元々が顔を見るといって程度の非公式なものだったのだろうと納得する。

執務室に戻ると、レオナードはいつものように机の前に腰を下ろした。

エリアスは手早く残りの書類を整理しながら、ハルトの姿を思い返していた。

（確かに明るくて素直だが……あの純粹さが、後々厄介なことにならないか……）

御子という立場であれば、王宮の中でも注目される存在になるだろう。そのうえ、王弟であるレオナードと近い関係になれば、噂が飛び交うのは目に見えている。自分が動くのが一番いい気がするが、今の立場を考えるとやや考えものだ。

王弟殿下の恋人。それが今の王宮で自分に貼られたレッテル。たとえそこに他意がなくとも、嫉妬からの牽制、と捉えられてもおかしくない。そうなれば事態は余計に複雑になりそうだ。

（カーティスに頼んでみるか……？ いや、あいつもまずいのか……）

八方までとはいかずとも六方向ほどは塞がれていそうだ。視界に映るレオナードは机に向かい、

手早く書類を捌いている。

執務室の空気は静かだった。けれど、その静けさが逆にエリアスの心を落ち着かせなかった。

エリアスは、自分も手元の書類を進めながら「……御子は、殿下を慕うでしょうね」とぼつりと言葉を漏らしてしまった。レオナードの手が止まる。

「それはどういう意味だ？」

「少しお話をしたんです。とてもあなたを尊敬しているようでしたよ」

「……なるほど」

レオナードはそれ以上言葉を続けず、作業に戻る。

気にはならないのだろうか？ そう思えば思うほど、エリアスは心の奥がざらついた。レオナードが御子をどう思うかなんて、自分には関係ないはずなのに。

こんなことなら——好きにならないければ良かった、とさえ思う。

「……殿下は、あのような方はお好きですか？」

エリアスは自分でも意地の悪い質問だと思いつつも、言葉を止められなかった。レオナードは書類から顔を上げ、じっとエリアスを見つめる。

「さあな」

「……お答えにならないんですか」

レオナードの目がどこか探るように細められた。けれど、そのまま言葉を続けることはなかった。エリアスもそれ以上話題を広げるつもりはなく、ただ黙々と仕事を進めた。だが、心の中でだけ

「何をやっているんだ、自分は」と苛立ちが募っていく。

——なぜ、こんなにも余裕がないのか。そんな理由なんてわかりきっている。わかっているけれど。

「エリアス」

不意に呼ばれ、顔を上げる。

「さつきから機嫌が悪いな」

「別に、そんなことは……」

「そうか？ お前は機嫌が悪いと私のことを殿下と呼ぶぞ？ 私が誰かに目を移すと思っているのか？」

エリアスは答えず、ただ目を伏せる。

「——お前は気にしすぎだ」

「……そうかもしれない」

小さな声でそう返すエリアスの胸の奥には、小さな棘が刺さったままだった。

そこから、二人は無言だった。幸いなことに仕事は山ほどあったし、心の内に少しのざらつきはあっても、お互いに険悪になるほどではなかった。

夜が更ける頃、ようやく作業が一区切りつき、エリアスは息を吐く。机の上を片付けながら、ちらりとレオナードを見遣った。

「……殿下、今夜はもうお戻りに？」

「いや、今夜もここに残る」

レオナードは当然のように答えた。

「……ここに、ですか？」

「そうだ」

レオナードが軽く微笑む。それは、お前と一緒にいたい、という恋人の合図だった。聞き慣れた声は甘く響くが、エリアスの胸の奥にはまた「ここでしか求められない」という言葉が湧き上がるのを止められない。

疲れが滲み始めた思考は、あまりにも簡単に、最悪の結論へ辿り着いてしまう。けれど、拒むにはレオナードを愛し過ぎていた。

「……わかりました」

エリアスは表情を崩さないまま、静かに頷いた。

「ならば、もう少し残ります」

「そうしてくれると助かる」

レオナードは満足そうに言い、再びエリアスの隣に立った。

「エリアス」

「……はい」

「仕事は終わったのだから、少し休め」

そう言うと、レオナードはエリアスの背後に回り、肩に手を置いた。いつものように、身体を引